

<挨拶>

地球システム倫理学会の方向性について

地球システム・倫理学会副会長 吉田宏哲

地球環境問題というのは我々の日常生活環境の中では、普通はほとんど知覚もされなければ認識もされない問題である。例えば地球温暖化と云っても今のところ夏の暑さが厳しくなったとか、暖冬現象で山に雪が少ないとかとを感じるぐらいで、常識的には夏は暑いに決まっているし、冬は暖冬と云っても寒い日も続くことがあるのだから、それほど目くじらを立てることもあるまいと思いがちである。それから種の絶滅の問題にしても、地球上の種の3割が絶滅あるいは絶滅の危機に晒されていると云うが、実際には我々が見たことも聞いたこともないような生物種が絶滅していると云われても、「それは大変ですね」と他人事のように済ませてしまっても、自分の人生や日常生活にはまったくといっていいほど関係がない。地球上の飢餓人口は6億とも8億とも云われているのに、我が国では暖衣飽食の生活をほとんどの人々が享受してきた。

しかし、最近の世相を見ると、地球環境問題を惹き起こしている根源ともいえる経済環境が地球規模でパニック状態になっている。これは云うまでもなくアメリカ発の金融危機とそれに付随する実体経済の危機であって、我々はこれをも安閑として拱手しているというわけにはいなくなってきたと云わざるを得ない。

それでは我々はこのような事態の生起の中でどうすればよいか。この解決は巷間問題になっている政局や政策の転換等で成し遂げられるものなのであろうか。答えは勿論否であって、政局や政策も勿論問題の解決には不可欠であるにもかかわらず、問題自体が現代科学技術文明とそれに基づく市場原理主義そのものが惹き起こしている事態であるとすれば、その科学技術文明と市場原理主義そのものに対する、根源的な批判的認識に基づいた、一人一人の人間の生き方の確立とそのための教育が要請せられていると考えなければならない。

釈迦は一切のいのち有るもの（有情・衆生）の存在論的あり方を生老病死等の四苦八苦と捉えてこれを乗り越える道を見だし、その方法を人々に説かれた。また、その後興起した大乘仏教は、自由と平等の相反する原理の調和を、仏教的叡知に基づく徹底的な利他行の遂行によって解決しようとした。地球のいのちや環境が老化し病んでいる今、その古道に学んで新たな叡知を見だしこれを提示することは、人々に光明をもたらすと思うが如何であろうか。この方向性の追求は地球システム倫理学会の存在理由への一つの有力な視座を提供すると私は思っている。